

国立国会図書館国際子ども図書館講演会
「多文化社会における児童書・児童サービス」
第一部「本は世界への窓、自分を映す鏡
—何故、多文化出版が重要なのか—

2007年7月7日(土)
パトリス・アルダナ
(Patricia Aldana)

はじめに

ご紹介ありがとうございます。

いつも行ってみたいと思っていたこの美しい国日本に来て、皆様の前でお話出来ることを私は非常にうれしく思っております。

この度は国立国会図書館そして、国際子ども図書館のお招きを受けて今日の講演会のために日本にまいりました。

日本はIBBYの国際的な活動を常に支えて来ていただきました。国際アンデルセン賞、それからIBBY朝日賞(IBBY朝日国際児童図書普及賞)のスポンサーだけではなく、山田養蜂場の山田英生社長はアフリカ及び津波の被災国、そしてレバノン、パキスタンにおける危機にある子どもたちのために多大なご寄付を下さり、山田基金(山田ファンド)を利用して、IBBYは様々なワークショップを開催してまいりました。こういった活動を通してIBBYは、世界中の子どもたちに向けて読書運動を展開すると共に、非常に質の高い本を世界中で作ってまいりました。

こういった中で、今日私がお話しするテーマは「多文化社会における出版の重要性」です。私にとって多文化の出版とIBBYの仕事は、それほどかけ離れたものではありません。

多民族の国カナダ

さて、本題に入ります前に少し私の自己紹介をさせていただきたいと思います。その方がなぜ私がこれからこのようなお話をするのかを皆様にご理解いただけたらと思うからです。

私が生まれたのは、メキシコの南にありますグアテマラという国です。今ではオリンピックの関係でグアテマラも有名になりましたが、オリンピック開催が決まるまではあまり新聞に名前が出てくるような国ではありませんでした。

(注:数日前にグアテマラにて国際オリンピック委員会総会が開催されて2014年冬季五輪の開催都市が決定された。)

私の父はグアテマラで医師をしていました。母はボストン出身のアメリカ人でした。母方の父がグアテマラへ来たのは、考古学の仕事でマヤ文明を研究するためでした。

私は13歳の時に英国ニューイングランドの寄宿舎に送られました。今思えば、そこでの生活はあまり楽しいものではありませんでした。それから、アメリカのスタンフォード大学へ進学しました。そして、25歳になった時にカナダに移り、今に至っています。私はカナダに移住したことが、人生の中でも大きな決断で、幸せなことだったと思っています。

移民の子どもがさらにまた別の土地へ移住するという事はカナダではよく聞かれる話です。実際にトロントで今暮らしている人たちの約半数以上が、別の国の出身ということですので、トロントで出会うカナダ人たちの2人に1人は実は移民ということになります。そしてその移民の人たちの出身国は世界中のあらゆる国です。そういう意味でカナダという国は日本と対極にあるのではないかと思います。実際日本もよくよく見れば純粋に一つの民族だけで構成されているわけではありません。

出版における多文化とは

今日私は、多文化社会における出版の役割についてお話をする依頼を受けています。私の経営する出版社 Groundwood Books はカナダのトロントにある出版社で、設立以来いわゆるマルチカルチャー（多文化）という側面を持つ本を専門に出版してきました。では、マルチカルチャーとは本というものにどのような意味合いを持つのでしょうか。

一般にメインストリーム（主流。ここでは白人を指します）ではない子どもたちのための本などが多文化の本と言われています。多文化の人々とは一般的に言いますと有色人種であったり、移民であったり、先住民の人たちを指したりします。こういう人たちはしばしば「少数民族」、「少数派」というような言い方をされています。先ほども言いましたように、トロントのような街を見ても、その内の半分ぐらいが外から来た人たちで構成されています。ですから、どの民族が多数派であり、少数派であるかということとはわかりません。

こういった多文化の中での出版活動というものは、大多数である白人の人々、それからその子どもたちに対して出版をしていくこととは大きく異なります。

カナダで最初に児童文学が生まれた時に書かれた本は、大半はメインストリーム（つまり白人）の作家たちによって書かれています。例えば有名な『赤毛のアン』の舞台はカナダの東海岸の非常に小さい島です。この島でアンが生まれ育ったという設定になっています。カナダの田舎のプロテスタントの環境です。そこでは、多くの人が白人の作家が書いたこの本を読んで簡単に感情移入をすることができる。そういうカナダの大多数の人々のためにこの本は書かれていたわけですが、これが今や世界中のいろいろなところで読まれているということは、この本の作品の質が非常に高かったということを示していると思います。

しかし、この『赤毛のアン』が書かれた 20 世紀初頭のカナダには、実は白人以外にもいろいろな人種が住んでいました。例えば中国人労働者です。

この人たちはかなりの数で、大陸横断鉄道を建設するために動員されていました。また、太平洋沿岸を見ても、日本人の漁師、それから農民たちが仕事をしていました。その他にも、ユダヤ人、ウクライナ人などが大勢住んでいて、特にカナダの草原地帯に住んでいました。こういう人々の活躍がありまして、今やこの草原地帯は世界の大穀倉地帯になっています。

そして、その他にももちろん先住民の人たち、つまりファーストピープルと呼ばれるような人たちもその当時のカナダには住んでいました。こういった先住民がかつてはカナダの大地に根ざして、カナダの土地を所有していました。その人たちは移民や探検家がやってきた時、非常に親切にして手助けをしたのですが、その結果、彼らは全てを失うという皮肉な結果になってしまいました。しかし、『赤毛のアン』を読みますと、彼らのような少数民族はどこにも見当たりません。

そして、そういう中にも幾つか例外がありますので、ご紹介いたします。1 人はポーリン・ジョンソン (Pauline Johnson) という 20 世紀初頭の女性作家です。彼女の作品は典型的な例外です。モハービ族 (Mohave Indians) の「テカヒオンワケ」(Tekahionwake) という名前で作品を出しています。彼女はモハービ族の父親と英国人の母親の間に生まれ、詩人であると同時に、ストーリーテラーで大変有名になりました。モハービ族の服を着てカナダ中を講演旅行しています。

彼女は様々な本を書いて成功していますが、彼女にとって常に自分の誇りの中心にありましたのはこのモハービ族の伝統です。彼女がかつて同僚であるカナダの作家アーネスト・トンプソン・シートン (Ernest Thompson Seton) に対してはっきりとそのことを伝えています。アーネスト・トンプソン・シートンは、特に動物文学で有名です。彼女はアーネストに「私は白人の女性と呼ばれるのが嫌である」とはっきりと伝えています。また、「私の人生の目的、そして私の喜び、誇りは生まれ育った先住民の栄光

を語り継ぐことにある」、そして、「先住民の誇りを高々と掲げて、先住民の絆を誰にも侵害されることなく生きていきたい。かつては私たちの民族がこのアメリカを所有していたのだという誇りを持ち続けたい」とはっきり語っています。

それから、作家でもう一人、先住民であるということでも有名になった作家がいます。お配りしましたレジュメの写真にありますように、グレイ・アウル (Grey Owl) という作家です。彼は、本当は英国人でした。本名はアーチボルド・ビラーニ (Archibald Belaney) といいます。彼の作品に *The Adventures of Sajo and her Beaver People* (1935) というものがあります。彼自身は先住民である、つまりカナダ人であるけれどもインディアンであると言って、英国では大変有名になって大成功したのです。講演旅行では、いつでもたくさんの聴衆を惹きつけていました。しかし、実は彼はにせ者でした。肌の色を少し黒くして、髪の毛を長く伸ばし、「自分は先住民である」と吹聴していたのです。最終的には彼はアルコール依存症で亡くなってしまいます。亡くなってから実はにせ者であったということがわかり、あまりにも英国で有名であったがために、死後大きなスキャンダルになってしまいます。

ルーシー・モード・モンゴメリー、グレイ・アウル、アーネスト・トンプソン・シートンといったところ以外で、ほとんどカナダでは1970年代中ごろまで児童文学は存在しませんでした。しかも、白人以外、つまり移民についての本はさらに少なく、現実の移民の流れとは対照的でした。

私は今カナダについて話していますが、英語圏のカナダを念頭において話しています。一方でカナダには、ケベックという地域があります。この地域は、他のカナダの英語圏と全然違うとはいいませんが、やはり歴史的には他の地域とはちょっと異なりますし、多文化というものに対する捉え方も独特ですので、そういうところを注意してお話をお聞きになってください。

マイノリティ作家の出現—1970年代のカナダ

1970年代半ばに、これまでとは違った画期的な本が出版されました。カナダの英語圏モンリオールにあるツンドラブック社 (Tundra Books) という出版社を運営していたメイ・カトラー (May Cutler) がこれらの本を出版しました。 *A Prairie Boy's Summer* (1975) と *A Prairie Boy's Winter* (1973) というタイトルです。これは、プリミティブアーティストのウィリアム・クレラック (William Kurelek) というウクライナ人が作った作品です。カナダではウクライナ人は非常に重要な民族ですが、この本は初めて、ウクライナ人のコミュニティーを扱いました。20世紀初頭に、多数のウクライナ人がカナダに連れて来られました。ロシアのステップ地帯からやって来たウクライナ人ならカナダの厳しい冬を生き残ることが出来るだろう、そして、農業の技術を持ち込んでくれるだろう、と期待されたからです。こうしてカナダの大草原に住むことになったウクライナ人たちのコミュニティーをクレラックは非常にリアルに、そして美しく描写しています。今ここにスライドでお見せしていますが、本当にカナダの冬はスライドの画にあるような冬なのです。

それから、次に紹介する本ですが、これもやはりツンドラブック社から出版されました *A Child in Prison Camp* (1974)。邦訳は『強制収容所の少女』(前川純子訳 富山房 1974) です。作者はシズエ・タカシマ (Sizue Takashima) という日系カナダ人です。非常に感動的で美しい物語で、日系カナダ人の子どもがその家族と共に収容所に送られた経験が作者自らの経験として綴られています。カナダの歴史における非常にひどい不公正な時期を物語っています。

もう一つ、 *Obasan* (1981) というジョイ・コガワ (Joy Kogawa) の作品です。邦訳は『失われた祖国』(長岡沙里訳 二見書房 1983) です。これは児童書ではありませんが、作者の子ども時代の経験をもとに書かれており、発行されてから今に至るまで青少年たちの間で読まれています。この本が出版されて、カナダ人は

それまで知らなかった日系人の戦争中の強制収容というショッキングな事実気づかされました。

この本を読むことで、カナダの市民でありながら、単に日系人だったというだけで強制収容所へ送られ、第二次世界大戦中をそこで過ごしたという経験について私たちは学ぶことが出来ます。日系カナダ人はその時に家を失い、農園を失い、漁船を失い、そして仕事を失いました。そして、戦争が終わった後でも 1953 年頃までは西海岸に戻ることは許されませんでした。このような本を通じて、カナダ政府は過去に行なった行為について償うことを考えるようになりました。もちろんそれは一夜にしてではなく、何年もかかりましたが、最終的には収容所に送られた人々へは謝罪と、形ばかりの不十分な経済的補償が提供されました。

今紹介した本が非常に珍しいと言えるのは、少数派のコミュニティー出身の人たちによって直接語られているからです。それまでは、多文化と呼ばれるものであっても白人の手を通じて書かれたものばかりだったからです。

それからこの時期の素晴らしい作家をご紹介します。ジェイムズ・ヒューストン (James A. Houston) というカナダ人です。ヒューストンは北極地域に住んで、イヌイットアートを世に生み出した人です。また、北極の生活について素晴らしい子ども向けの小説も書きました。

それからもう一人ご紹介いたします。こちらにもマイノリティの作家ではなく、白人の作家によって書かれて成功した作品です。この作品は私たちの Groundwoods 社が 1978 年に出版したベティ・ウォーターソン (Betty Waterson) の *A Salmon for Simon* という作品です。ある日、西海岸に住む一人の先住民の少年が魚釣りに出かけます。そこで、1 匹の鮭を釣り上げるのですが、最後には釣り上げた鮭を大鷲に取られてしまうという話です。

今ご紹介したこの二つの作品はそれぞれ白人によって書かれているのですが、内容は非常に信頼性があり、いわゆるステレオタイプに陥

っていない素晴らしい話です。

なりすましマイノリティ:問われる作品の信憑性—1980 年代

しかし、ちょうどこれらの本が書かれた頃にいろいろな問題が起きました。白人が出版した少数民族について書かれた本の内容は本物ではない、という声が上がりました。といいますのは、これらの作品の題材になっている先住民の人々がこれらの本を読んだ時に、その描かれている内容に自分たちの本当の姿を見ることが出来ない—つまり、書かれている内容は偽物であり、おこがましいという発言が先住民自身から上がりました。

この運動は 1980 年代後半に起きました。その後、運動は非常に大きく発展しました。この運動は、「作品の中の声の信憑性—本物であるかどうか」ということを問う運動へ発展しました。この運動は、カナダで起こると同時に、アメリカでも大きく発展しました。この運動の中で、少数民族の作家たちから批判が上がりました。少数民族の作家たちは、「自分たちは作品を発表することができない。少数民族の生活などについて作品発表しているのは白人だけではないか」と主張しました。白人 (アフリカ出身のアメリカ人や先住民たちの経験を代弁している人たち) の作品だけが出版されているという彼らの主張は残念ながらその通りでした。それがきっかけになり、少数民族たちにとっては非常に長期間に渡る辛い論争の時代に入っていきます。特にこれは北アメリカで顕著で、作家や挿絵作家などを巻き込んで「盗用された声」という議論として発展していきます。

そして、この時期に開かれたいろいろな会議は大変熱を帯びて、時には怒りに満ちた議論になるということがよくありました。特にカナダの作家協会などの団体が会議をすると、その会議が大変荒れるという事がありました。この時期は大変苦難に満ちた時代であったと言えます。どういう権利があって、私たちが語るべき話をあなたたち白人の人々が語るのか、という怒りの声沸き上がったのです。彼ら少数民族の立

場からすると、本当に少数民族であるという経験が、あなたたち白人にわかるはずがないというのです。

一方で、白人の作家たちは、「自分たちは作家である。つまり、自分の想像力を掻き立てて作品を作るのである。それが作品を書くということの本質ではないのか」と主張しています。自分ではない誰かの立場に身を置いて作品を作る、それがものを書くということではないかと反論したのです。

この運動は出版業界にも非常に大きな影響を及ぼしました。私自身、この議論を聴きながら感じたことは、ここで問題になっているのは、少数派から突きつけられた大きな疑問—つまり、少数民族の人たち自身は本を出版する権利が無いのに、彼ら自身が語るべき話を同じ民族ではないメインストリームの白人たちがなぜ出版する権利を持っているのかということでした。

先ほど私が紹介した本の中で、幾つかの例外として少数派の人たちが書いた作品を挙げましたが、一般的にはこの時代には、いろいろな理由—歴史的な理由や人種差別などが背景にありました。市場は少数民族の書いた作品を望まず、白人たちには、自分たちとは全く顔や形が違う人の話を聞くことに対する不快感がありました。そのような理由が少数派の人々が書いた作品の出版を大変難しくしていました。また、その当時はどうしても白人たちは、作品の内容が本物であるか偽物であるかという事よりも、作品の内容が面白ければいいと思って本を読んでいました。先ほどの *A Salmon for Simon* などの作品などは喜んで受け入れたのです。

中国系カナダ人作家たちの作品と想い

そしてこの時代は、私たち出版社にとっても大変厳しい時代でした。しかし、私個人の例をお話ししますと、1984年(こういった論争が始まる前です)に出版して、非常に成功した作品がありました。今スライドで見ていただいているこの挿絵の本です。タイトルが *Chin Chiang and the Dragon's Dance* といいます。この作品の作者はイアン・ウォレス (Ian Wallace) とい

う若いカナダ人です。この本はニューヨークのマーガレット・マクエルダリー社 (Margaret K. McElderry Books) によって出版されました。ドラゴンダンスを踊りたかった少年の話です。

後にカナダ映画協会から、この作品をアニメ映画にしたいという大変うれしい依頼がありました。私もこの依頼を大変うれしく思いましたし、この映画をディレクターとして編集する方も中国系カナダ人をお願いしようと、話が進んでいました。作家の方も大変喜んでいて私たちは浮き立っていました。ところがカナダ映画協会から、「このホームプロジェクトは中止になりました」との知らせを受けました。バンクーバーにある中国文化センター会長の大変著名な中国系カナダ人(第4世代)の作家ポール・イー (Paul Yee) が「この本は本物ではない」と言ったからなのです。さらに彼は、「この本の内容は正確ではない、ここで語られている中国人の少年の声は盗まれた声である。だから、この本を出版する権利はない」と宣言したのです。

その1年後、私はポール・イーとバンクーバーで会う機会がありました。彼はちょっと神経質なところがありましたが、会ってみると非常に親しみやすい人でした。私は彼に、「では、あなたは本物のお話を知っているのですか」と聞きました。すると、すぐに彼は1冊の本を送ってきました。それは、私たちがこれまで出版した中でも優れた作品でした。その作品は、*Tales from Gold Mountain : Stories of the Chinese in the New World* (1989) というタイトルでした。内容は、現代版のおとぎ話のような形で、中国系カナダ人たちの過去の経験、鉄道建設、漁業や農業を西海岸でどのように行なったのが語られていました。中国系カナダ人の勇敢な姿、そして残酷な現実を非常にグラフィックに描いています。民族性と信憑性を素晴らしい形で融合させた物語でした。

しかし、ここで一つ問題が出ました。話の内容が本物であれば、やはり本物の中国らしい美的感覚を持った挿絵をつけて出版したいと思いました。しかし、どうやってイラストレーターを探したらいいのでしょうか。私は当時、中国

系カナダ人のイラストレーターを全く知りませんでした。そこでポールには根気強く待ってもらって、私たちはイラストレーターをいろいろ探しました。何人も候補者に会ったのですが、どれもピンと来ません。そして、約2年かけて、ついに見つけたのが若い美術大学の大学院で学ぶサイモン・ング (Simon Ng) でした。

それから、ポール・イーは、その他に *Ghost Train* という作品を書いています。この作品は、カナダの子どもたちの中でも一番人気がありますし、また数多くの賞を受賞しています。全てこの作品の挿絵はハーヴィー・チャン (Harvey Chan) が担当しました。

カナダには中国系の移民が非常に多く、現在は50万人といわれています。こういった中国系のコミュニティーに対して、もう何世代も前から移民していたポール・イーのような人たちでなくても、つい最近カナダにやって来た子どもたちでさえもこれらの本を読むことで自分たちのルーツに誇りを持ち、自分たちの祖先がどのようにしてカナダという国を作ってきたのかを理解することが出来ます。同時に、自分たちの祖先がカナダで正当に扱われず、差別を受けてきたということも子どもたちは本を読んで知ります。

Groundwoods社は、中国系カナダ人のコミュニティーと非常に密接な関係があります。そのため、さらにいい本を出版することができました。例を挙げますと、アンコー・チャン (Ange Zhang) の *Red Land, Yellow River : a Story from the Cultural Revolution* (2004)、邦訳は、『赤い大地黄色い大河』(稲葉茂勝訳 今人舎 2005) です。この作品のテーマは、中国で起こった文化大革命です。直接カナダには関係はないのですが、カナダに中国の移民がやって来たその動機の背景には、文化大革命が関係しています。政治的な話になりますが、中国が経験した動乱がこの作品の中には語られています。またこの作品は、著者がこういった経験にもかかわらずアーティストになるための道を見つけていくという成長の物語でもあります。この話は中国系カナダ人たちが多く共感できるものでも

あります。

そして、こういった素晴らしい本が世に出ることになったのは、まさに語られたストーリーが真実—それを経験した人たちからじかに伝えられたという過程があったからだと私は強く信じています。多文化社会における出版とはこういうことであり、私もこうした経験を通じて非常に多くのことを学びました。また社会的にもよいことだったと思っています。移民の物語を語ることによって、その文化が社会に知られること、また、移民が自らの歴史を知ることとは意義のあることだと思います。

それから、実際に経験者が自らを語るということが多くなってきましたが、こういった本が出ることによって、私はカナダの出版界の姿勢そのものにも影響が出たと思っています。そして、本によって語らなくてはならないまず第一の人たちは、先住民だと思います。私は先住民の物語を出版することに、特別な責務を感じます。

辛い時期を経験したカナダのマイノリティ作家たちの作品

カナダでは、レジデンシャルスクールと呼ばれる寄宿舎制度が80年間ぐらいありました。先住民の子どもたちが強制的に入れさせられて、英語、フランス語という自分たちとは異なった言葉を学ばなければならなかったのです。そして、寄宿舎ですので家族とは離れた生活を強いられ、いろいろ大変辛い経験をしました。時にはいじめられ、体罰や性的な嫌がらせなどを受けました。このことは大変な問題でした。このような学校は、キリスト教のアングリカン(英国国教会派)、カトリック、プロテスタントなどの様々な教団がこういった施設を運営していました。最近になり、カナダ政府は先住民に対して、このことは間違いだったと正式に謝罪しています。

先住民はカナダで非常に長い間、厳しい大地の中で独自の文化を生み出して、狩猟、採集、釣りをして自立して生きてきました。しかし、この寄宿舎制度により、その文化や家族から引

き離されて強制的な教育プログラムを約3世代にも渡って経験しなければならなかったのです。このことは、文化的な虐殺と言ってもいいのではないかと思います。

この大変辛い時期に先住民の作家が書いた作品を3冊紹介します。面白いことに、作品では辛い経験そのものを語るのではなく、その前の非常に楽しかった時期—つまり、「失われた楽園生活」に焦点を当てる作家が多かったのです。

(画像を見せて) 今皆さんに見ていただいている画像は、子どもたちを学校に連れて行くためのトラックです。このトラックの壁はとても高いので、外が全然見えません。外から遮断されているという感じで、子どもたちの辛さが出ていると思います。子どもたちはしばらく経つと夏休みで故郷に帰ってくる事が出来るのです。

これらの作品は今皆さんに見ていただいているのですが、どれも「失われた楽園生活」に言及しています。先ほど画像で見ていただいた男性ですが、彼は非常に著名なイラストレーターであると同時に、作家でもありますレオ・イエクサ (Leo Yerxa) という先住民です。彼が書いた作品の1つに *Last Leaf First Snowflake to fall* (1993) があります。主人公が父親と一緒に山に入って非常に自然に密着したキャンプ生活をし、素晴らしい楽しい思い出となるというお話です。2冊ほどご紹介いたしました。どれも1冊仕上げるのに10年ぐらいの時間をかけて、大変美しい作品に仕上げられています。

それからもう1冊をご紹介します。トーマス・キング (Thomas King) という作家の作品です。特に先住民の作品はユーモアが一つの大きな特徴になります。劇場で演じられるものについてもブラックユーモア的なものを含めて非常にウィットに富んだ作品が多いです。1992年に出版された *Coyote Columbus Story* は、コロンブスが上陸した時を主題にしています。この本が出版された時には、非常に論争になりました。編集者のトム・マシュラーは、「この本は良書のアンチテーゼだ」という批判をしたほどです。今、この画面でお見せしているものです

が、コロンブスがやってきて、原住民を奴隷にしようとしているところです。

それから、こちらの作品です。北極地帯に住む先住民の話です。イヌイットの子どものたちの生活を描いたものです。それぞれ自分の育った様子、それからイヌイットアーティストの絵で綴られています。

今ご紹介してきた作品の中の様子は、カナダにおける主な3つの少数民族のコミュニティーを描いています。Kids Can Press が出版した日本人の女の子の話もあります。

「多文化」の間違った使われ方

それから、ここで見ていただいている画像は、ドイツの例です。ドイツのイラストレーターのロートラウト・スザンネ・ベルナー (Rotraut Susanne Berners) が作った本です。これを見ていただきますと、この画像の風景は村のようにみえるのですが、本当の村ではなく、想像で作った村です。ドイツの出版社がこの作品の権利を買いませんかと私のところにやって来たのです。私はこの作品を見て、ちょっと問題があると感じました。この作品の絵のどこを見ても白人しかいないのです。「カナダはこんな風じゃありません。もっと少数民族もたくさんいます」と答えたら、出版社の方が「いやいや、よく見てください。ごみ収集の人は、ムスリム系の人ですよ」と言ったのです。確かによく見ると、ごみ収集の人の中に何人かムスリム系の住民の人々がいました。実は、この作品の作者は、この絵の中に白人だけでなく、こういったムスリム圏の住民が入っているせいで批判をされました。実際ドイツは、そんなに多く少数民族がいないのに、政治的な偏りがない作品であることをアピールするために、わざわざムスリム圏の人を入れたでしょうと批判されたのです。でも実際、私はドイツの街を歩いていますと、ムスリム系やトルコ系の移民がたくさんいることに気がつきました。ですから、この絵は、やはり本当のドイツの小さな村の現実とかなりかけ離れていると感じました。

こういったことが私たち IBBYにとってどう

いう意味を持っているのか、なぜこの多文化(マルチカルチャー)ということが大事なのでしょう
か。

ここで、ポイントして私が挙げたかったことは、この多文化という言葉を使う時に、どうもこの言葉が間違った使い方をされているのではないのかと感ずることです。多文化という言葉の中には一種の強制的でわざとらしい、政治的に正しい立場や考え方という意味合いが含まれているという気がします。その結果、出版物自体が非常ににせ物くさい、偽りのルールで支配された凡庸な本しか出版できないことになっているのではないかと思うのです。つまり、その挿絵の中には必ず黒人が3人、アジア人が2人、それからラテン系、ヒスパニック系を1人登場させなければならないといったようなルールに縛られているのです。私たちがカナダで本を出版する際は、そういう虚偽のルールから自由でありたいと思っています。

世界の「窓」となる本、「鏡」となる本

私が大変好きな言葉で出版物(本)のあるべき姿を言い表したいと思います。それは、IBBYのマカオ大会で、メキシコの代表のエリサ・ボニーラ(Elisa Bonilla Rius)さんが言った言葉です。彼女は、「子どもたちは世界への窓となるような本を必要としている。また、かれらは鏡となるような本を必要としている。」と話していました。

これは、カナダの子どもたちだけではなく、世界中の子どもたちが持っている権利であると私は考えています。つまり、彼ら彼女らには自分自身を映し出す鏡であるような本が必要でありますし、世界に向けた窓となる一より広い世界を開いてくれるような本が必要です。

本を鏡と窓に例えるという考え方は大変豊かな考え方です。なぜかといいますと、非常に狭い意味での多文化という考え方を超越しているからです。つまり、各コミュニティは、それぞれ独自の価値を持ち、それぞれが対等であり、芸術的に表現することが可能だ、という考え方だと思います。ですから、メインストリーム中

心の発想で、マイノリティはここに何人配置する、という政治的に正しいやり方にのっとった立場の考え方よりさらに広い大きいものを含んだ考え方で、様々な異なった世界の現実、それから共通の現実に目を向けた考え方だと思います。

これまで私はずっと鏡となる本ということでお話をしてきましたが、なぜそれほどこの考え方が大事なのかをお話します。この問題の回答は、子どもたちが本を読むことで、生涯に渡ってどういう影響を受けるのかということを考えていけば明らかになると思います。

これは私自身の考えですが、もし子どもたちが読む本の中に自分を投影することが出来ない、または自分自身を見ることが出来ないのなら、たとえアンデルセン賞を受賞した素晴らしい作品が手に取れる環境にあったとしても、こうして自問自答する時が来ると思います。自分には価値があるのだろうか、何か自分の人生には間違ったおかしなところがあるのではないのだろうか、だから私のような人間は本の題材として取り上げられていないのではないのだろうか。つまり、私には価値がないから誰も私のことを本の中に書いてくれないのではないだろうか。そして、なぜ私は本の中に出てくる子どもたちと違うのだろう、彼らと同じような経験をする事が出来ないのだろうか、と(自問するようになるのです)。

それから、子どもたちは今や絵本だけではなく、様々な大衆メディア(映画、テレビ、音楽など)に囲まれています。その中で自分たちは常に不在であることに気づきます。そうしますと、自分の価値がどこにあるのか、自問自答するようになるでしょう。

常に自分が本の中で不在であることは、自己の尊厳にとって大変ダメージが大きいことだと思います。自信を失ってしまうことに他ならないのです。

私は、自信というものは健全なものだと思います。他人に対してやみくもに暴力を振るう人たちの中には、自分の文化に対する深い屈辱感が見えることがしばしばあります。こういった

人たちはその暴力の中に怒りや憎しみを込めています。その感情の底を流れているのは屈辱感だと思えます。

そして、今度は先ほどの例えで言うところの「窓」です。子どもには窓となる本が必要です。というのは、私たちは皆、世界各国から生まれてくる一番いい本に対してアクセスできることは、極めて大事です。IBBYの創設者イエラ・レップマン(Jella Lepman)は、これを原則としていました。つまり、本によって民族間の理解を生み、本が橋となる。それによって、世界平和に近づくことが出来るのです。しかし、橋がしっかりとしたものであるためには、まずその橋を支える橋げたが同じような力で支えられるものでなければならないと思えます。橋を支える2つの橋げたが強力な鏡であり、窓であり、その2つの役割が対等な力を発揮できて初めて、私たちはその橋を渡ることが出来るのではないのでしょうか。

そして、鏡であり、窓である本は濁りのあるものであってはなりません。そこに映るものが歪んでいたり、嘘をつくものであってはなりません。

出版業界の役割

毎年、英語で子ども向けに出版される本は10万冊といわれています。しかし、ほとんどの本は特になくてもいい本ばかりだと思えます。しかし、英語で出版されることによって、世界に対してはより「窓」として受け入れられてしまう可能性(これを良いと見るか悪いと見るかは別として)があることは確かです。しかも今出版業界では、利益をめぐり非常に大きな圧力がかかります。出版される本は耳障りのいい、何となくぼんやりとした、スムーズな製品(プロダクト)、鏡でもなければ窓でもない、単に商業的なものに過ぎないものが多く見受けられます。

では、どこで私たちは本当の鏡となり、私たちを写し出してくれるような本を見つけることが出来るのでしょうか。先住民のカナダ人の子どもであれ、東京に暮らす日本人の子どもであれ、キューバ、モンゴルの子ともであれ、私た

ちはどういったところで普遍的な真実を垣間見ることが出来る「窓」としての本を見つけることが出来るのでしょうか。その真実は、本当にその文化の中で生きた人々、世界の中で非常に力強く生きた人たちの経験をベースにしているものでなければなりません。そうあってこそ、初めて国境を越えることができるのです。例えば、ビアトリクス・ポター、モーリス・センダックのような作家は、今はどこにいらっしゃるのでしょうか。

こういった本を提供するのは一体誰なのでしょう。それはやはり、それぞれの国の出版業界の人たちです。私は、本はその本の作者と同じ国の出版業者によって出版されるのが望ましいと考えます。多国籍企業である出版社に依存して、地元の作家たちもそこに頼るのは違うやり方だと思えます。

私の知る限り、日本ではこういった問題はあまりないと聞いています。そうは言っても利益を重視するのではなく、本当に質のいい子どもの本を中小出版会社が出版していくのが極めて難しいということは海外と変わらないとも聞いています。しかし、日本以外の多くの国では、地元で作られた本を現地の出版業者が出版するのは極めて難しいです。

それでは、理想的な出版業界の役割とはどういったものなのでしょうか。私は世界のどの国であっても、その国の出版業者がきちんとした研修を受け、質の高い仕事をするのが望ましいと思えます。そういった出版業界の主な存在理由は、地元の作家やイラストレーターたちを掘り出して、さらに彼らを奨励して、その作品を配給していくことだと思います。それと同時に、世界各地の質の高い本をその国に紹介していくことも大事なことだと思います。

ユネスコが、文化多様性条約(Convention on the Protection and Promotion of the Diversity of Cultural Expressions)を2005年の第33回ユネスコ総会で採択しました。2か国を除き148か国が既に批准していますが、批准しなかった2か国がどこなのか皆さんにはお察しがつくでしょう。この条約は、各国が独自の文化的な創

作物を守るために（他の物品などとは異なる有利な）対策を取ってもよしとする条約です。対象となるものは、映画や音楽、そして当然図書も含まれています。この条約は国際的な政策として、非常に重要な第一歩だと思っています。

期待される司書の役割

話は変わりますが、以前にスウェーデンに住んでいるイラン系スウェーデン人の司書の方とお話する機会がありました。その時に彼は、「特に司書にとって大事なものは、一人一人の子どもに正しい適切な本をその本が必要である時期に与えることである」と言いました。スウェーデンという国は単一民族に近い国であると思われていますが、そういった国でも実は少数民族が入ってきているという現実があり、彼の発言にも繋がっています。

それから、アメリカの司書たちが率先して起こした一つの運動をご紹介します。アメリカで出版される子どもの本の中にアフリカ系アメリカ人が不在ではないかという議論が始まったのです。数百年前に多くのアフリカ人がアメリカに連れて来られて奴隷になり、そして、この国で汗を流してこの国を豊かにしてくれたという歴史があるにもかかわらず、そういう国の本の中にアフリカ系アメリカ人がいないというのはけしからんということになり、それが一つの大きな機運となりまして、今やこういったアメリカの本の中にもアフリカ系アメリカ人の顔が登場するようになりました。ここには、アメリカの出版業者たちが積極的に関与したという経緯があります。

このような形で、アメリカの司書、図書館員たちが大いに努力をして他のメインストリームの子どもたちが様々な経験を得て社会の中に参画していく機会を与えられているのと同様に、アフリカ系アメリカ人もまたそのような機会を与えられなければなりません。ものを読む力をつけ、本を読むという生涯の愉しみを身につけることができるような権利を彼らにも与えるべきだ、という運動を起こしたのです。

出版業界は、素晴らしい本を出版していくた

めに図書館の司書たちの力を必要としています。司書こそが、子どもたちが今どういう本を必要としているか、どういう子どもたちがどういうタイミングで、どのような本が適切なのかを熟知しているのです。ですから、司書たちだけが本当に優れた本を選択することが出来るのです。出版社にとって、司書たちは常に大きな助けとなっているのです。

私たちが今生きている社会は大変難しい社会です。子どもたちがこれから先直面するであろう大変厳しい問題に対して、私たちはその準備をするという責務を負っています。ですから、司書や図書館のスタッフ、出版界は、子どもたちの手助けをして、立派に前進して、世界に対して力強く、心の開けた、自信に満ちた、そして、知的好奇心を持った子どもに育てるという手伝いをする立場にあると考えています。どうもありがとうございました。

質疑応答

出席者： 質問というよりも、とても共感させていただいたことがあります。カナダのファーストピープルと呼ばれる人たちが様々な悲惨な歴史を抱えて今まで生きて来られましたが、語ろうとする時に、その前の幸福な日々を語るということをお話の中で知りました。実は、パレスチナの難民キャンプで長く暮らしてきた人たちも、自分たちの暮らしや歴史を語ろうとする時に、故郷の村を追われて以来の悲しい日々を語るのではなく、むしろその前に暮らしていた故郷の村の日々の楽しさ、幸福を語ろうとするのです。あちこちの人たちがパレスチナの人々に聞き書きをして、本を作る運動をしています。そこに非常に大きな共通点を見出して、とても心打たれました。人間ってそういうふう生きていけるのだなと思いました。ありがとうございました。

出席者： 大変意義深い講演をありがとうございました。スライドでマイノリティの方

の絵本をいろいろと拝見させていただきましたが、やはり英語での出版だったと思います。先ほど国際的な出版社が英語で出版するというお話もありましたが、国内で出される場合、英語以外の元の言語などで出版されることはお考えですか。

アルダナ： 私自身、スペイン語を話しますし、スペイン語で出版物を出したこともあります。確におっしゃったとおりです。マイノリティの持っている固有の言語で出版をするということは、私たちも考えていきたいと思っています。実は、幾つかそういう試みをしたことがあります。特にカナダの中でも北部に住んでいるマイノリティのグループの言葉で出版を試みたことがあります。技術的な難しさがあります。こういった言葉というのは、アルファベット化されていなく、口伝えの言葉であったりするので。ですから、単にシラブル（口の中の形）だけでしかまとまっていないのです。そういったものを本にしていく事は大変難しいです。

カナダ北部のマイノリティの言語で出版した本については、ユーコン準州政府がこの地域の言葉で出版したいという希望を持っていました。そこに補助金を出していただいて、本をまとめたことがあります。ただ、こういった試みをする時、政府からの援助がなければそういう計画は成立しないのです。ですから、そういった試みはさらになさなければいけないと思います。

出席者： どうもありがとうございました。どうしても国の利益が見込めない事業の場合、財政的な問題が関わってくるのかな、と思うと、なかなか考えさせられるものがありました。

出席者： 先ほど、「カナダの英語圏の出版に限ってお話をします」とおっしゃっていましたが、ケベックを始めとしたカナダの

フランス語圏の出版事情と、カナダの英語圏の出版事情の関係とはどのようになっているのでしょうか。私たちは日本語の本ということで、一つにまとまってしまうので、あまりイメージが浮かびません。

アルダナ： ケベックは人口の非常に少ない州で、700万人ぐらいしかいません。フランス語を話さないアングロカナダの人口は約2600万人ですから、大変規模が違います。そして、この2600万人の中の4分の1は英語を話しません。自分たちの元々の国の言語を話しています。

特にケベック州は北米においては非常に特異な地位を占めていて、フランス語を話す非常に小さいマイノリティのコミュニティです。フランス語のアイデンティティということに非常に強い執着をしている地域です。その結果、多文化の出版に関してはそれほど関心を持っていないとも言えます。

とは言いながらも、ケベックと、英語を話すカナダの地域との間では大変盛んな翻訳の文化（フランス語から英語、英語からフランス語という形）を持っています。ケベックの著名なイラストレーターの作品などを最初に英語で出版したのも英語圏のカナダの出版社です。ケベックにはいろいろ優れた作家がいます。例えば、マリー＝ルイーゼ・ゲイ（Marie-Louise Gay）、ピエール・プラット（Pierre Pratt）などの作家の作品は英語に翻訳されています。

ケベックのために申し上げたいことは、ケベック州内で大変活発な出版の文化があるということです。フランス語から英語、英語からフランス語への翻訳は活発に行なわれています。

出席者： 今日ご紹介いただいたたくさんのは、日本語でも出版されているのでしょうか。

アルダナ： 一部は出版されています。『赤い大地黄色い大河』は日本語で出版されています。それから、先ほど北極のエスキモー型の家を作る写真をお見せしましたが、あの作品も、『「イグルー」をつくる』（あすなろ書房 1999）というタイトルで、日本語で出版されています。それ以外の作品は、私の知る限りではまだ日本語に翻訳されて出版されていないような気がするのですが。

出席者： ありがとうございます。もし、国際子ども図書館で日本語に翻訳されている作品がわかりましたら教えていただきたいのですが。

司会： 今のところ、日本語に翻訳されていることがわかっている作品が 5 冊あります。

アルダナさんの最初の方の話で出てきました作品の *A Child in Prison Camp* は、『強制収容所の少女』という邦題の出版があります。それから、ジョイ・コガワの作品 *Obasan* は、『失われた祖国』という邦題で出版されています。それから、アンコー・チャンの『赤い大地黄色い大河』は、先ほどアルダナさんからのご紹介にあったとおりです。マイケル・A・クスガック (Michael Arvaarluk Kusugak) の *Northern lights : the soccer trails* という作品は、『オーロラのひみつ』（新風舎 2004）という邦題で出版されています。それから、ウーリー・ステルツァー (Ulli Steltzer) の作品で、イヌイットたちが住まいを作る様子の写真集が『「イグルー」をつくる』という邦題で出版されています。以上 5 冊が日本語に翻訳されています。

出席者： 翻訳出版のことでお聞きしたいと思います。アルダナさんのお話をうかがいまして、カナダはすこぶる多民族の国家だということがわかりました。というこ

とで、他の地域のアフリカ、南アメリカ、アジアなどのカナダ以外の国で出版されている児童書の出版の実情をお聞かせ下さい。

例えば、1 年間新刊でカナダで出される出版物を 10 としますと、海外で出される出版物は 1 などと、何かわかるような数字がありましたら教えてください。

アルダナ： 私共の出版物については、よく把握しています。例えば、わが社で出版する様々な本の 75 パーセントぐらいは、海外に出版、翻訳という形で外に出しています。その中の大半はヨーロッパの市場に出ています、アジアの市場へは非常に少ないです。とはいえ、アジアの中でも韓国へは私たちの出版物は非常にたくさん紹介されています。

印刷の世界の中で、英語で出版される本というのは世界で非常に大きな利点を持つということが言えると思います。それに対して多文化の出版物は一番受けられないのです。

出席者： カナダ全体での児童書の中に占める海外からの翻訳本の割合について、解りましたらお願いいたします。

アルダナ： 英語以外の言葉で出版される本については、非常に不利にあるということは先ほど申し上げたとおりです。とはいえ私共の出版社は、そういう点では例外的ではないかと思えます。私たちの出版社は、海外から生きた作品を翻訳して英語圏に紹介するという点については、おそらく北米でもナンバー1 かナンバー2 の地位にあると思えます。大体、例えばその年の新刊が 30 タイトルぐらいあるとしましょう。私共が翻訳するのは大体 5 タイトルに上ることもあります。

1920年から30年代、40年代にかけて、非英語圏の文学を英訳するという運動は非常に活発であったと思えます。ですが、現在はそれが沈滞気味だと思いま

す。非英語圏で非常に成功した大作一例
えばセルマ・ラーゲルレーヴの『ニルス
のふしぎな旅』などは英語にはなかなか
翻訳されないというような現状があり
ます。

出席者：大変有意義なお話をありがとうございました。
特に、どんな子どもも自分を投
影できるような本がなぜ必要かとい
うところで、本当に自分の意味を確認する
ことが必要なのだと感心いたしました。

私は出版業界とは関係がないので
すが、普段はフランス語を教えています。
特に最近、多言語教育というものに興味
を持っています。特に今はグローバリゼ
ーションの時代ですが、日本の人々が考
えるべきことは、戦争する権利が欲しい
ということではなく、いかにして世界の
人々と対話をするかということだと思
って、多言語教育を推進しようとしてい
るのですが、その中では絵本がとても効
果的だと気づきました。そういうものを
教材として使っています。その中で 2
つぐらい最近の傾向として気づいたこ
とがあります。1つは著作権の問題です。
著作権の問題が近年非常に厳しくなり
まして、学校などでも簡単にコピーはで
きない状態です。教員側からすると、ち
よっと紹介しにくい状況です。著者の権
利の保護と、誰にでも簡単にそういうも
のにアクセスできる要求等をどうい
うふうに共存させていくべきとお考え
でしょうか。

あと1つですが、私はこの国際子ども
図書館のホームページはとても美しい
ホームページだと思います。この美しい
ホームページでこの講演会を知りまし
た。最近、インターネットが非常に力強
いメディアになって来ています。そうい
うものと、どういふふうに共存してい
くべきと考えていますか。

この2点（著作権の問題、インター

ネットと書籍の関係）について、少しご
意見をうかがいたいと思います。

アルダナ：最初に著作権のご質問からです。

確かに私たちの出版会社は利益第一で
仕事をしているわけではありませんが、
利益がなくてはやはりビジネスを続け
ていけないというのも現実です。そう
いう意味では著作権は、出版業界が存続
するためには欠かせない基本的な所有権
と考えています。

しかし、今おっしゃったように教育の
現場でコピーを取るということにつ
いては、カナダ、北欧、中南米、フランス
の例をご紹介したいと思います。こう
いったところでは、文部省と教育委員会が
出版社と交渉して、教育の現場でコピー
を自由に出来るように合意を結んでい
ます。もちろんこの場合、使用目的とい
う事は厳しく制限されています。そう
する事によって一般の教員はコピーをし
て文献（本）を使うことができます。し
かし、著作権がなくなるという事は、私
たちの存続に関わる事ですので、これは
権利として保留したいと思います。

それから、私はインターネットにつ
いては全然知りません。知っているのは、
島多代さんが作っていらっしゃる絵本
の紹介のホームページ（当館ホームペ
ージの「絵本ギャラリー」）です。とても
美しいです。それ以外はあまりよく知り
ません。